

# SUNNY

強い気持ち・強い愛

監督

大根 仁

×  
プロデューサー

川村 元気

秘 時代を創る  
トップクリエイター  
対談!!!

各界から  
絶賛コメント  
続々!!



BACK TO THE 90S  
あの頃よりも  
輝く自分になる!

8.31 FRI  
ROADSHOW

1990s-2018

©2018「SUNNY」製作委員会 TOHO

コメント掲載順不同

あの頃の私。未来の私。未来の私は、今の私。

40代 おばさんだってホントは新たな道を切り開きたい野望を抱いている…でしょ?

あの頃の音楽を聴くと若さが蘇る。いつだって、いつまでも青春していたいんだ!よね?!

歳をとってガッカリなんてしないで今をもっと愛そう!そんな明るい気持ちになる映画!

hitomi  
歌手

恐らく芸能界で初めてだと思うのですが、面白すぎて試写会を二回も観に行っちゃいました…。申し訳ございません…。それほど面白かった!

ムーディ勝山  
お笑い芸人

夢に向かって走っていく中で、ぶつかりながらも、すべてに一生懸命な彼女達の姿に元気をもらいました。

神木隆之介  
俳優

オリジナルにほとんど忠実で、オリジナルより泣けた。号泣した。オリジナルより感動した。日本もこんなに凄くて、キュートで、センスのいい映画を作れる。

見城 徹

感動!感動!感動!大人SUNNYの逞しさ、高校生SUNNYの煌めきに涙がとまらなかった。帰り道、全ての女子高生、全ての女性に、エールを送りたくなった

#SUNNY強い気持ち強い愛 #藤原涼子さんの直向き #板谷由夏さんの頼もしさ #渡辺直美さんの支えっぷり #小池栄子さんの華やかさ #ともさかりえさんの振り切りのかっこよさ #そしてなにより #広瀬すずちゃんの名コメディエントっぷり #ってかとにかくかわいい #もう広瀬先輩って呼びたい #広瀬ハイセン

鈴木杏  
女優

叶うことなら、公衆電話で\*2\*2を押して「2018年には、90年代の日本に戻れる『SUNNY』というタイムマシンが誕生するよ」と、17歳の僕が持つベルを鳴らしたくなりました!

しずる 村上純  
お笑い芸人

80年代、90年代の曲が大好きな私には、たまたま最初から最後まで興奮まくりでした。観ながら一緒に踊りたくなってウズウズしていました。高校時代の濃い思い出や仲間達ってやっぱり素敵だし、これから歩いていく上ですぐ支えになるんだらうなと改めて思いました。いやー。素敵すぎる本当にもう1回観たいなあ。

伊原六花  
女優

この映画の時代設定のど真ん中世代なので、様々なシーンで映り込む小物や音楽がめちゃくちゃエモかったです。ストーリーも素晴らしく、とても感動しました。笑い&涙、ドッチャモです。

直井由文  
BUMP OF CHICKEN

韓国版「SUNNY」大好き芸人としてハッキリ言わせてもらおう!!日本版も最高過ぎる!!舞台が90年代後半と40代突入した私にとってのヒストリームービー!「巨人・大鵬・卵焼き」いや!「プリクラ・安室・egg」なんだ!!大根監督らしさが光る、ありそうでなかった青春エンターテインメント傑作!

ニブンノゴ! 宮地謙典  
お笑い芸人

本当に面白くて、どこか懐かしさがあり、そして切なさがありました。笑っているうちに、一緒に涙が流れるような映画でした。その時代を生きていない私でも、タイムスリップできたような気分になりました。観てる人誰もが自分の過去や今を見返し、考え直せる作品だと思います。

安藤ニコ  
モデル

いつの時代も懸命に生きる女性たち。その美しく逞しい姿に、そっと背中を押して応援したくなりました。ちょうど世代である、うちの社員にも見てほしい映画です。

藤田晋  
株式会社サイバーエージェント  
代表取締役社長

自分の女子校時代の懐かしさ、社会人としてパワーをもらった90年代のエネルギーな女子高生達、元気になれる音楽とダンス、そして女の友情、可愛くて、好きな要素が多すぎて、まるごとぎゅっと抱きしめたい映画でした。

八木亜希子  
フリーアナウンサー

SUNNY

強い気持ち・強い愛

藤原涼子 広瀬すず  
小池栄子 ともさかりえ 渡辺直美  
池田エライザ 山本舞香 野田美桜 田辺桃子 富田望生  
三浦春馬 リリー・フランキー / 板谷由夏  
監督・脚本:大根 仁 音楽:小室哲哉  
原作:「SUNNY」CJ E&M CORPORATION sunny-movie.jp

8.31 FRI  
ROADSHOW



# 監督 大根仁 conver sation 対談 プロデューサー 川村元気

## 時代を創るトップクリエイターの(秘)対談

### 企画の始まった一日

— 大根さんは2012年の日本公開時からオリジナルの韓国映画『サニー 永遠の仲間たち』を絶賛されていましたね。

大根: 確か劇場に三回観に行ってるんですよ。あの映画って大人の女性客だけでなく広い層に受けていた。みんな上映が終わる頃には滂沱の涙で。しかも僕は1980年代半ばに高校生だったので、ヒロインたちと同じ世代なんです。でも自分でリメイクしたいとは全然考えなかったですね。ただ、その前の年の秋に『モテキ』が公開された流れで、川村さんとはよく会ってたんです。

川村: 僕が『バクマン。』の企画を大根さんに持ちかけていた頃ですね。大根: それである夜、原宿の居酒屋で飲んでいた時に『サニー』の話になって。川村さんは気が早いから「これリメイクできるんじゃないですか?」っていきなり言い出したんです(笑)。だけど僕は「無理だよ」って。あの映画は80年代の民主化運動っていう韓国の社会全体のターニングポイントが背景だから、そのまま日本に置き換えても成立しない。そしたら川村さんが「じゃあどうやったら成立するんですか?」って訊くから、「コギャルの時代ならイケるかもね」って答えたんです。

川村: そこで、ほう、と。思って。「じゃあ音楽は?」大根: 「もちろんTK(小室哲哉)でしょ」と。そしたら川村さん、「じゃあリメイクできそうですね」って。今考えれば誘導尋問の気がするんだけど(笑)。

川村: いやいや、僕は何の考えもなしにそういうことを言ってるんですよ。ただ「TKの時代はカラオケで女の子たちが歌う曲がいっぱいあったよね」って大根さんが言った時点で「これは映画になるな」って思ったのはよく覚えています。

大根: しかもそこで話題に上がったのが安室奈美恵さんのこと。コギャルの教祖的な存在だった彼女が40才になったらすげえよなって話も、実はその日に出ているんです。

川村: 15才でデビューして、20才で結婚したシンガーが、40才でもトップスターとして居続けていることの凄さ。この会話をしていたのが6年前で、楽曲使用をお願いしたのが2年前。まさかこのタイミング(2017年9月16日に40歳でデビュー25周年。2018年9月16日をもって引退)で映画が公開されるとは夢にも思わなかったなあ……。

### 90年代半ばという日本社会の分岐点

— 大根さんがオリジナル『サニー』の女子高生たちと同じ世代なら、川村さんは今回の『SUNNY』の主人公たちと同級生ですね。

大根: 川村さんはコギャル世代の男の子なんだよね。川村: モロにそうです。95年に高校2年生だったので。それで大根さんが「コギャルの時代」って言った時に、思えば日本の90年代ってすっご

い変だったなと。ルーズソックスやギャングロなど過剰で歪なファッションが流行して、特に95年は1月に阪神・淡路大震災があり、3月にはオウム真理教の地下鉄サリン事件が起きて、世の中が騒然としていた頃で……「なんだったんだろう、あれは」と。

大根: あの頃はバブルが弾けてから数年経って、世紀末の不穏なムードもあったし、先の見えない不安や恐怖をたくましくサヴァイブする感覚が若い子たちに生まれたと思う。象徴的な現象が女子高生のコギャル化ですね。それは韓国の80年代に起きた抜本的な社会変化にも引けを取らない。

川村: 重要な日本の分岐点。ただ僕個人からすると90年代って暗い時代なんです。社会的にもネガティブなトピックが続いたし、僕自身の高校時代も決して楽しいものではなかった。コギャルも正直怖かったですね(笑)。

大根: 僕は90年代ってカオスだけど面白い時代だった。世の中の的にも音楽的にもいろんなことが起きて。コギャルの世間をナメてる感じとか、すげえパンクだなんて。

川村: そこはリアルタイムの高校生目線で見た僕の90年代と、ちょっと大人の立場から俯瞰して見た大根さん視点の「差」がポイントになると面白いのかなって。ちなみにこの映画って僕の世代の男の子……男子高校生が全く出てこないんです。怖いほどに。だから僕は自分が主観カメラで見ている90年代の風景、みたいな気分になるんですよ(笑)。

— 韓国の80年代の民主化の流れってアメリカナイズとも言えますが、日本の90年代に起こったことは極端にドメスティックな現象ですよね。

大根: 他どの国とも重ならない。その意味ではすごくオリジナルだった。川村: ガラパゴス化の極みであり、海外への妙な文化コンプレックスが消えたという意味でも今の時代につながっていますよね。

### コギャルの時代とは?

— 回想パートの時代設定はあえて明示していませんね。

大根: 時代考証の答え合わせを追求する方向はやめました。コギャルの歴史を紐解くと、社会現象になって雑誌「egg」が創刊されたのが95年。隔月から月刊化したのが97年。それと同時に全国に伝播して、爆発的なコギャルブームが起き、あとはネタ的に消費されて終焉していく。だから95年から97年がコギャルのかっこいい時代。この

「自分の物語の主役になる」ってことが普遍的なテーマ【大根】

映画の背景はその時代のどこか、ってことです。

川村: 「差」というキーワードに絡めると、当時のコギャルが今はすっかり普通の大人になって生きている。その過去と現在のギャップが面白くなって。例えば過激な政治運動やってた団塊世代のおじさんがしれっと企業人やってる、なんてことに近い。

大根: その当事者の意識を知りたくて、元コギャルの女性たちに取材したんですよ。「サニー」のメンバー的な、今でもたまに会う5人組みたいな人たち。皆さんに集まってもらったら上品な奥様たちで。若い頃の写真を見せてもらったら大爆笑! っていう。

川村: ビフォーアフターぶりがもろに(笑)。

大根: 彼女たちには「コギャル監修」として女子高生役の子たちにレクチャーしてもらいました。ルーズソックスの位置とかスカートの短さとか、カーディガンのサイズ感とかショッパーの持ち方とか。時代劇の所作みたいなもんですよ(笑)。ちなみに教室の様子に関しては、「egg」の創刊にも立ち会った編集者の米原康正さんが貸してくれた秘蔵のビデオが参考になりました。94年に都内の某女子高の生徒にHi8カメラを渡してドラ撮りしたもの。大人目線のバイアスが掛かっていない、本当にリアルなコギャルの生態が映された貴重な動画。

川村: 大根さんの資料集めはすごいですね。今回も日常描写のディテールは大根さんのアーカイブ力で作った部分がたくさんある。

大根: 当時のアイテムに関しては、スタッフにもコギャル世代の女性たちがいたので随分助けられました。ただ現物を探すのは大変で、当時のミゼーンやアルパローザやヒステリックグラマーのショッパーとかはメルカリに売ってた(笑)。“写ルンです”とかも当時のデッドストックを使っています。

### 選曲とキャスティング

— 今回の映画のセットリストは本当に珠玉の名曲ばかりですね。

大根: サウンドプロダクションのレベルが驚くほど高い。当時は当たり前じゃなかったけど、高品質のヒット曲を改めて聴いた衝撃は非常にありましたね。とりわけ90年代のJポップは小室哲哉さんの時代。今も歌い継がれる国民的なアンセムや特定の世代歌をたくさん作られていた。

川村: その中でも主軸になったのは、やっぱり安室奈美恵さんの曲。

大根: もともと気になっていたのが、カラオケに行くと「SWEET 19 BLUES」を演歌のように歌う女性がいっぱいいて。もう「天城越え」くらいのエモさで(笑)。ある世代にとっては自分の物語と同一化したアンセムなんだなって。

川村: もう一方の軸に小沢健二さんの「強い気持ち・強い愛」がある。

大根: 僕の中では90年代のテレビ文化においては「HEY! HEY! HEY!」ってすごく大きいんです。人気絶頂のダウントウン司会のもと、いろんなタイプのミュージシャンがごちゃ混ぜになって出演していた。その常連出演者の象徴的な存在が安室ちゃんとオザケンだと思ふ。歌謡曲と呼ばれた既成の文脈ではなく、新しい音楽の人気者。しかも全く違う流れから出てきた二人。

— エンドシーンは感涙でした。現在と過去が同じフレームに!

大根: オリジナルの『サニー』を観たときに、最後にみんなでもう一回踊るんだよなと思っていたら、踊らず終わっちゃった。だから自分がリメイクするなら、時空を超えて最後にみんなで踊るっていうのは最初から決めていたんです。

川村: 今回は20年以上の歳月を挟んでの二層構造なので、キャスティングに関しては違和感がないよう議論を重ねました。センターの篠原涼子さんはTK時代を背負っているシンボリックな存在でもあります。その女子高生時代を誰にするかって話になった時、大根さんから広瀬すずさんって案が上がった。

— 篠原さんと広瀬さんの顔がちやんと似ていることに驚きました。

川村: 僕は最初「えっ、全然似てくないですか?」って言ったんですよ。そしたら大根さんが「似てるんだよ」って。

大根: うん。意外とみんな気づいてないけど。

川村: さすがです。最近、大根さんは男の子ムービーが続いてましたけど、やっぱり『モテキ』みたいに女の子をいっぱい撮るといって改めて思いました。

大根: でも女子高生チームの演出は結構苦労しましたよ。まず彼女たちはコギャルを知らないから、みんなを集めて黒板に「コギャルとは?」って書いて30分くらいの講義をやった。

川村: 社会科の先生だ(笑)。

大根: いまコミュニケーションツールはスマホがメインですけど、当時は直接話すことなんですよ。で、みんな一斉に話すから誰も聞いてない(笑)。そのテンションを若いキャストに理解してもらうのは難しく。たまり場に集まって喋るところは何回も稽古したり、現場でも何十回もやったし。社会科の先生から演劇部の顧問になってガシガシごきました(笑)。

### 自分の物語の主役になる

大根: この映画は「自分の物語の主役になる」ってことが普遍的なテーマの部分じゃないかなと思います。それをいつしか忘れていた女性たちが主演の意識を取り戻すお話とも言える。これまで僕が監督した映画って、どこかに自分を投影しやすかったんですよ。でも今回はサニーのメンバーに寄り添うことが大事。いつも彼女たちの隣にいる気持ちで撮りました。

川村: 本作は別に90年代懐かしムービーではないんです。老若男女問わず「自分の物語だ」って思える映画にしたいとずっと願っていて。あの頃と今の自分、どっちが楽しく生きているのかなってことは誰でも考えたりしますよね。若い人にとっては未来を想像して、かけがえのない今の時間を実感する物語になっているのかもしれない。だから映画を観る側も含め、みんなが主役の話なんだと思います。

### 大根仁

HITOSHI ONE  
1968年生まれ、東京都出身。主な監督作品『モテキ』(11)、『恋の渦』(13)、『バクマン。』(15)、『SCOOP!』(16)、『奥田雪』(12)、『バクマン。』(15)、『君の狂わせるガール』(17)

### 川村元気

GENKI KAWAMURA  
1979年生まれ、神奈川県出身。主なプロデュース作品『電車男』(05)、『告白』『悪人』(10)、『モテキ』(11)、『おおかみこどもの雨と雪』(12)、『バクマン。』(15)、『君の狂わせるガール』(17)

「自分の物語だ」って思える映画にしたいとずっと願っていて【川村】